

崇学会だより

第15号

発行日 令和3年3月1日
発行所 崇学会事務局
〒860-0082
熊本市西区池田4丁目2番1号



崇城大学
学長 中山峰男

教職に携わっておられる崇学会会員の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。また、予てより母校発展のため、ご理解とご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大という未曾有の危機のもと、大変な日々をお過ごしのことと拝察いたします。緊急事態宣言、外出自粛、休業要請等が出され、世の中の流れが完全に止まっており、会員の皆さまもいろいろとご苦労されていることと存じます。

今般のコロナ禍において、学生と教職員および関係する多くの方の命と健康を守ることを基本方針とし、卒業式や入学式など式典の中止と、できる限りオンライン化による対応とをとり、遠隔授業を中心とした教育をスタートさせました。この間、ICT環境の整備と支援、一方で遠隔授業の準備と教材作成、研修や実験実習系を中心とした一部対面授業の実施など、受講する学生と教育を担う教職員の双方にとって、努力と創意工夫が求められました。

新しい教授体制に十分に対応できるかという一抹の不安もありましたが、オンデマンドを含めた授業の改善などを「新型コロナ対策教学検討委員会」で話し合い、コロナ禍に対応した最善策を講じてきました。

さて、18歳人口の逡減に伴い、大学運営も次第に厳しさが増してきており、選ばれる大学であるためには、どのような大学であるべきかを絶えず考えながら対応させていただいています。学生が本学での4年間あるいは6年間に自らの個性を発見し、その才能を伸ばしてくれるよう教育環境の整備を進めています。

本学では、AIやヒト・モノ・コトをデジタルで繋げるIoTなどに対応できる人材を育成するため、情報学部を「未来情報コース」「知能情報コース」「電子通信コース」に改編しました。これからのデジタル社会の構築に貢献できるよう、様々な知見を相互に交換することで、新しいものを生み出し活用できるスキルの習得を目指しているところです。

コロナ禍という難局は災難ではありますが、社会システムの大きな変革の必要性を投げかけられており、大学にとっても、教育研究および社会貢献活動に「新しい日常」が求められています。

これを、新しいものに挑戦し適応する柔軟性、自分にできることは何かを考える発想力、そして自分なりの工夫を加える応用力を育む機会と考え、アプローチの幅を広げていく契機の年へとつなげていけるよう、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。



情報学科棟1階にあるIoT・AIセンターの内部

教員として活躍する 先輩からのメッセージ

後輩達へ！ 教職への熱い志に応える
そこに機会を提供するのも OB の役割。



崇学会
会員 高尾 亜勇夢
令和2年 機械工学専攻(修士) 卒
現・玉名工業高校 講師

崇城大学を卒業し、令和2年度から講師として玉名工業に勤めています。この学校に来てはや一年、コロナ禍で始まり、私たち教職員にとっても不安と未知でのスタートとなりました。

私が教師を目指した理由は2つあります。一つ目は、中学生の頃の先生の存在です。その先生はいつも一緒になって教科の問題や課題を考えてくださいました。先生の励ましのおかげで、問題が解けた喜びは大きいものになりました。このように生徒に寄り添い、感動を与えられる教師という仕事に携わりたいと思いました。二つ目は、大学でものづくりを体験できたことです。仲間と共に一つのものをつくることであらゆる壁をチーム一丸となって超えたときは、自身の成長を実感することができました。このようにものづくりを基軸にして生徒の生きる力を育成できる機械科の教師に遣り甲斐を感じ、強く教師になりたいと思いました。

まだ採用試験には合格していませんが、今年一年、講師として仕事をする中で、多くの遣り甲斐を感じました。四月当初の分散登校から六月には通常登校になり、生徒たちの笑顔が増えていきました。また、生徒が就職試験に合格したことを笑顔で報告に来てくれた時は、自分のことのように嬉しく思いました。大変なこともたくさんありますが、それ以上に遣り甲斐もたくさんあります。ぜひ、目指してください。

人と人との出会いが自分を成長させると思います。私自身もたくさんの人と関わり成長してきました。私の好きな言葉に「為せば成る、為さねば成らぬ何事も」があります。日々、いろんなことに挑戦してください。



崇学会
会員 松村 優世
令和2年 応用化学専攻(修士)卒
現・熊本市立鹿南中学校 教員

私は大学院一年生のときに熊本市の教員採用試験に合格し、昨年度から中学校理科教員としてはたらしはじめました。今回は、この場をかりて後輩の皆さんに、私が教員採用試験合格のためにやっていたことと、実際に学校現場を経験して大切だと感じたことの二つについてお話ししたいと思います。

教員採用試験に向けて本格的に勉強を始めるに当たって、最初にすべきことは、自分の受験する市や県の問題形式と配点、傾向を調べることです。崇城大学の図書館には教採対策本が十分にあるので、まずは自分が受験を考えている自治体の出題形式を過去数年分調べてみましょう。そうすることで、一次二次の試験内容や自分が勉強すべき単元等が見えてくると思います。教採の一次試験は筆記試験のため、過去問演習を充分にしていれば必ず合格することができます。みなさんも苦手分野を中心に専門科目と教職教養をバランスよく勉強しておきましょう。また、教採は一次試験の結果が出てから二次試験までの期間が短く、約一週間でエントリーシート等を自治体に提出しなければなりません。これらの書類については各自自治体のHPにデータがあるので前もって準備し、作成しておくようにしましょう。

最後に、教員として1年間学校現場を経験して大切だと感じたことを伝えたいと思います。それは「自己管理能力」です。教員は毎日多くの人と関わる仕事なので、時には元気がない子や、つらい思いをしている子など様々な事情を持つ生徒と関わっていかねばなりません。そんな時に教師自身の状態が悪ければ、生徒ひとり一人と真摯に向き合う余裕を持つことはできません。教師の仕事は替わりがきかない仕事なので、心身の状態を健康に保つための自分なりの息抜きや、リフレッシュ方法を持つておくとうれしいと思います。私自身も休日は趣味の時間を大切にし、公私の充実した日々を送っています。

今年度はコロナ禍の影響が様々な所で出ていますが、健康に気をつけて夢に向かって頑張ってください。

ナノサイエンス学科 一年 大久保 哉真 (中学・理科)

私が教員になることを夢にしたきっかけは中学2年時の担任の女性の先生との出会いでした。その先生は理科を専門としており、授業で気になった部分を授業の後に聞くようになりました。先生は私が知らなかった専門的な内容も優しく教えてください、もともとあった理科への興味がより高まるようになりました。その先生の教え方は生徒側の視点を意識していて、分かりやすかったため物事を教える人として尊敬していました。また、その先生は授業以外の時間にも親身になって接してくださいました。

当時の私はいろいろ生意気で、気に入らない人は下に見て接し方を変えるような人間でした。そのことが原因で少しトラブルを引き起こしてしまいましたが、そのとき先生が私をきちんと叱ってくださり、きちんと人を見るよう努力しようというように考え方が変わるようになりました。この出来事から先生はただ教科書の内容を教えるだけでなく、生徒の人としての成長を手助けすることにも気が付き、先生という職業にあこがれるようになりました。

今の私はまだ教員を目指す者としては未熟ですが、人としてあこがれられるような先生になるべく努力していく所存です。

ナノサイエンス学科 一年 野田 寛之 (中学・理科)

自分が教員を目指そうと思ったきっかけは、中学校の時に行った「両親の仕事調べ」です。自分の両親はどちらも教員です。教員という仕事を調べているうちに、自分は教員に興味を持ちました。しかし、最初は「人に教えるのは大変そうだ」と思っていました。

自分が教員になりたいと思ったのは、授業でクラスメートに教える機会がありました。その時に「人に教えることは面白い」と思いました。自分は、理数系が得意なので理数系を教える時は、とても楽しかったです。

人に教えると自分にも身につくので、自分の為にもなります。高校1年生の時の進路希望の時には自分は、「教員になりたい」と思っていました。自分は、教員としてたくさんの生徒と触れ合い、生徒たちを導きたいと思っています。



デザイン学科 一年 船木 鈴 (中学・美術)

私は、高校の部活動の校外活動で子どもたちと作品制作をした経験をきっかけに教員になりたいと思うようになりました。その活動は、落書きで埋め尽くされてしまった高架下のトンネルに花の絵を描き、地域の方が安心して通れるようにするものでした。これに参加した子どもたちは、地域の小中学生で絵に興味のない子どももいました。最初は私が細かく指示をしていましたが、制作を続けていくうちに子どもたち自身がどうすればより良い作品になるか話し合い、考えながら制作していくようになりました。最後には子どもたち自身で仕上げ、私が想像していたものより遥かに良いものに仕上がりました。最初はなかなかできなかったことも制作を続けていくうちに、できるようになっていく様子に驚き成長を感じました。私はそれまで、自分で制作をすることが1番面白く、楽しいことだと考えていましたが、子どもたち自身で作品を作り上げていく中で、その成長を支えていくことが「楽しい、面白い」と感じるようになりました。私は絵に興味のない子どもにも「楽しい」という経験をさせることができるような教員になりたいです。

～教職 なかま～

教育と一言に言ってもその現場は様々なものがありますが、将来教員を目指すものとして人に教える環境にいた方がいいのではと思い、私は大学に入学してからの1年間塾で働いていました。そこでの学びはともありましたが学校教育に直接参加してみたいとの思いもあり、2年生の夏、熊本市内の中学校で学習指導員として働き始めました。

塾と教室で教えるという行為に変わりはないと思っていましたが、一対一であったとしてもその差がとてもあることに気づきました。教員からでないとしても生徒にとっては「学校で教えられた」ということに変わりはなく、つまり私の言動の一つひとつは学校の人の言動ということになります。学校としての教育を考えたとき大学で習った事を思い出し、その重要性を肌と感じました。様々な教育の環境に身を置く今だからこそその体験と感覚を大切に、そこで得られることを吸収して教壇に立つまでの成長の糧にしたいです。

教職を希望する学生が、挑戦している活動を紹介します



今回は、コロナ禍で試験に臨み、地元熊本県の中
学校美術教諭に見事合格した芸術学部美術学科・
日本画コース4年の川上加鈴（かわかみかりん）
さんをご紹介します。

特集 時代を拓く 教職希望学生の挑戦 ～現役発美術教員合格インタビュー～

—— 教員になろうと思ったきっかけはいつ頃だ
ったのですか？



高校時代より、大学で教職を取
ろうと考えていました。3年生の後
半より、採用試験の勉強を少しず
つ募集人数が少なく、難しいとい
うこともあり、迷いもありまし
た。

本気で教員採用試験を受けると決
意したのは、昨年の崇学会交流会への参加がきっかけ
でした。様々な方からお話をいただき、また自分の話
をする中で、やはり教員を目指したいという自分の意
志に、はっきりと気づきました。

—— 専門課程と教職課程の両立で、毎日かなり
の時間を制作と勉強が必要だったでしょう？

コロナの影響で昨年3月から6月は学内に一切立ち入
ることができませんでした。そのため、その期間は、採
用試験の勉強に専念していました。6月以降は、やっと
大学での制作が9時～16時のみ可能になり、その時間
は作品制作にあて、前後を採用試験の勉強にあてるこ
とで、両立できていたと思います。制作をしていると
きは、教職を意識し、「自分が教師として教えるならこ
うしよう」「まだまだこういう点ができていない」とい
うようなことも、並行して考えていたように思います。

—— 教職課程を学ぶ仲間たちとの雰囲気は、ど
のようなものでしたか？

教職の授業では、4～5人で1つの授業を作りあげ
るなどのグループ活動がよく行われています。お互い
に教え合いながら学ぶ、良い雰囲気ができていまし
た。日頃からこのような関係を築き上げているため、
採用試験前は、授業以外でも一緒に対策を行える仲に
なりました。また、教職課程担当の先生方はもちろん、
芸術学部の中にも、過去に教員を経験されていた
先生方が多く、教職の知識に合わせ、専門的な授業を
行う際のアドバイスもたくさんいただきました。

—— コロナ禍の影響で、試験対策で例年との
違ったところや苦労したことはありますか？

通常は、5月の教育実習で経験値を上げ、8月の2
次試験（模擬授業・面接等）に挑みます。今年は、コ
ロナ禍で教育実習が延期となり、何も経験しないま
ま、採用試験を受けることが不安でした。また、過去
の先輩方は、模擬授業や小論文の添削は、教育実習で
お世話になった先生にお願いしたと聞いていました。
しかし、今年はそのような事が出来ず、大学の先生方
に授業以外でも手厚いサポートをしていただいたこ
とが支えとなりました。



—— 教職の先生方の指導は、川上さんにとっ
てどのような自信につながりましたか？

教職課程を履修している学生はとても多いです
が、一つの理想像に私たちを近づける指導ではな
く、それぞれの学生の良さを認めてくれるので、自
信につながりました。また、色々な経験を積まれて
きた先生方ばかりなので、話の幅が広く、視野や考
え方が広がりました。

—— 「教えること」を今後どのように実践してい
きたいですか？

美術という教科は、正解がはっきりと決まってい
ない部分が多いため、生徒たちにほんの少しだけ手
を差し伸べ、生徒の思考をしっかりと尊重し、褒め
るところはしっかりと褒めていきたいです。子ども
たちとのリアルな教育現場ではうまくいくことば
かりではないと思いますが、一人ひとりの生徒と
しっかりと向き合い続けたいです。